

この頃思うこと

松島正幸

時代感覚というものは、多分に面白い群衆心理の上に立っているものか、これが現代の流行だとなると、何には兎もあれ、新しく美しく感ずるから不思議である。

服装にしろ、自動車にしろ、1950年型と、58年型を較べたとしたら、誰しも、後者を選ぶに違いないのである。

昭和初期に、フランスから帰朝した日本の画家達は、ピカソ・マチス・ドラン・プラマンク等々、いずれも当時のフオビズムの大家達の、影響というよりも、コッピの如き作品を持つて帰つたものだ。

それが、画壇では特選になり、話題になり、若い我々を刺激したものであつた。

批評家も、それを模写とは呼ばず、我々はそのコッピを通じて、本物のピカソやマチスに感心していたのであるが、現在はどうなのであろうか。

当時と違つて、外国作品の将来が、容易になつて来たので、そのままの模写は、無くなつたが、所謂応用というのは、随分多いのではあるまいか。それも、或は時代的影響とか、感覚的類似とか、呼ぶべきものかも知れないけれども、それにしても、なんと器用にやりこなすのだと感心する。

具象から、抽象を見ると、一寸素人眼には、ごまかし易いだけで、模写や、応用は同じである。

知人に、内外の優秀な作品蒐集家があつて、金持だから他に外国からの出版物も、多数持つていて、次々新しいものが入るので観せてもらうが、日本で新しいと思う仕事もこの画集をみると、あまりに早い応用だけなので、どう考えていかに苦笑する。

よくいえば、つまり何にをやつても、誰かがやつてしまつて仕事なのだ。

文化の交流が、世界共通語を発見するというのは、本質的にどうということなのか。

日本人というのは、感覚の良い人間なのだろうと思う。感受性が強くて、他人のものもすぐ、ソシヤクして、脱皮しながら、自分のものにして来たのかも知れないが、……

油絵が、日本に入つてから、もう百年近くなるのに、沢山のイズムばかりを呑み込んで、頭デツカチな、変な片輪者ばかり生んで来ているのではあるまいか。

印象派にしろ、後期印象派にしろ、フオビズムにしろ、シニールにしろ、何ににしても、実際作品の上で、本質的に外国の作家に、これこそ本当に立派な作品なのだ、誇り得るような仕事を、何人の人がして、残しているだろうか。

随分、生意気なことを書く野郎だと、怒らないで、本当に心から反省してみたら、誰しもそう思うのではあるまいか。

私は予言者ではないから、将来のことはわからない。しかし作家として、本当に生きるのには、どうあるべきかを考えている。

私は作家というものは、その人一人のことしか出来ないものだとこの頃思つている。何んでも出来るのが、才能でなくて、一つしか出来ないものなのだ。

その一つのもを、大きくとも、小さくとも、掘下げて行く以外ないし、それが作家というものではないかと思う。あつち、こつち、やりたい仕事か山程あるし、感受出来る仕事であつても、自分の出来る仕事以外のことはやらず、その一筋のもを、こつこつと築きあげて行つた人の仕事は尊いし、深いと思う。

そんな作品にぶつかると、ぼやぼやしている自分が恥しくて堪らない。新しいとか、古いとかなど、問題ではないその作家の背景というのか、筋金がピンと通つて、どうにも立派だというより他に、表現の言葉が無い。

運動の選手達は、世界的な記録を常に目標として、闘つているのだから、画家も国際的な大選手になる様な心構えでやらなくてはとて、本当の一流にはなれない。

こんな事を書くのも、つまり、私などは田舎の選手で、一生終るかも知れないと考えるから、尚一層、今後出て来る若い人達に、期待をかけるのだ。

大きな希みを持つて、小さなことに、こせこせせず、世界的な仕事をして欲しいと念ずるからだ。

作家というのは、タンペラマン（気質）ばかりで生きていようなものだから、先輩から学ぶものは、その気質だけでよい。

後から生れて来る者や、生き残つている者達は、皆んな先輩や、友人の意志を継いで、そのやろうとして、やれなかつたものを、必ず、やり遂げてくれるであろうからである。

一人の作家が、生きるというのは、そういうものなのであるまいか。



ガクブチと
洋画材料

松山額縁店

札幌市狸小路1丁目 T ④6726